

Y15c 観光学部における天文分野の教育研究と人材養成

尾久土正己、中串孝志、吉住千亜紀 (和歌山大)

和歌山大学では、2005年より全学の宇宙・天文関係のスタッフと地域の公開天文台のスタッフからなる宇宙教育研究ネットワークを立ち上げ、様々な教育研究を行ってきた。今年度新設された観光学部にも天文系のスタッフが配置され、新たに「観光学における天文分野」の教育研究に取り組むことになった。

一般に、人々の宇宙に対する関心は高く、国内だけでもプラネタリウムや公開天文台がそれぞれ300館以上建設されている。多くの施設が教育施設として自館を捉えているが、来館者の多くは観光施設として訪れている。実際に、諸外国では博物館や美術館は教育施設であるとともに、重要な観光施設として捉えられており、地域再生の中心的な役割を担っている例が多い。また、今や観光業界もグリーンツーリズムやエコツーリズムといった自然を体験型で楽しむ旅行が増えてきており、生涯教育との差はなくなりつつある。さらに、一部富豪層相手ではあるが大気圏外への旅行商品も扱われ始め、一般市民の宇宙への関心はますます高まるものと考えられる。

和歌山大学観光学部は、観光経営と地域再生の2つの学科からなる。これらの専門家と我々天文系スタッフが組み、観光資源として天文学関連施設を再定義することで、生涯教育だけでなく地域の活性化にも貢献することができる。実際の学部教育では、宇宙教育研究ネットワーク参加施設が所有する60cm~1mの光学望遠鏡、HI観測用8m電波望遠鏡に加え、学生プロジェクトで開発が進んでいるハイブリッドロケットや、本年度末に設置予定の超高精細デジタルドームシアターなどのリソースを用いて、一般市民が楽しめる教材の開発や新しい活用方法を創出しようとしている。

本年会では、観光学部全体の教育システムを紹介し、その中で天文分野をどう組み込み人材養成をしていくかについて議論したい。